群青の海に祈る

西岡　瑠璃子

2005・12

九条を守るおみなら団組みて特攻の町「知覧」を訪ぬ

数え日に知覧の旅を企てて特攻の兵士らの遺書に対(む)かわん

特攻の母に守られ辞世の句遺して群青の海に散華す

皇国の久遠祈りて桜花(さくらばな)咲くこともなく散りし海峡

ふたたびを生きて帰らじ特攻の若き兵士のみ霊に祈る

一千余のみ霊に祈る知覧平和館すすり泣く声おちこちに聞こゆ

海の面（も）を隔て聳ゆる開聞岳を臨みて祈る永久（とわ）の平和を

ホタルになりて帰って来ると飛び立ちし特攻の兵士のみ霊安かれ

知覧の池絶えだえにして流れ行く紅葉のいくつ屍のごとく

蕾かたき桜並木に続きゆく一千三十六柱のみ霊安かれ

辞世の歌遺して散りし特攻の若きらの魂（たまほご）反故にはさせぬ

改憲に屈してならぬ平和祈（ね）ぎ知覧を歩む十二月八日

〈女性「九条の会」高知に掲載〉

湯の街紀行（金婚旅行）

2008.3

紅葉（こうよう）を映して流れる大聖寺川滔々として湯の街のなか

紅葉(もみじ)狩りの人に押されて渡りゆく五十年ぶりの蟋蟀(こおろぎ)橋は

枯れくちし葛をまといて山毛欅(けやき)の樹　偉容保ちぬ鶴仙渓に

足弱き夫の姿を振り返り振り返りつつ渡るあやとり橋まで

半世紀前に訪ねし温泉町合併されて加賀市となりき

窓越しに湯煙の立つ宿の朝　川鴨の姿態をレンズに捉える

ここだくを踏みしだかれし紅葉の一枚拾いて蔵書に挟む

〈月刊短歌誌短歌往来に掲載〉

啄木慕情―比翼の歌碑―

2009・12

啄木の父一禎終焉の地の高知駅前に親子の絆結ぶ歌碑建つ

水の秋啄木父子の慟哭も刻まれ高知駅前に建つ歌碑

『一握の砂』『みだれ蘆』より啄木と一禎父子の比翼歌碑なる

秋霖の前線予告を確かめて啄木父子の除幕に急ぐ

若きらのあるいは離れ住む人の出逢いの場所ともなれかしと願う

わが国の現実の態そのままに啄木の詠む貧困の歌

漂泊の旅経てたどり着きし地に啄木父子の再会の碑なる

形よき緑色岩の自然石に刻まれし美学と思う啄木・一禎の碑

〈月刊短歌誌短歌往来に掲載〉

國生み

2013・1

縹渺の地の上に満ちてくる初日(はつひ)のなかを群れる子雀

国生みの古事記を読みて淡路島に固有の領土竹島を重ねる

仮設住宅に二度目の厳冬迎えいる人らに凍てつく復興予算

コリオリの力及ばぬ列島に嵐のような春の風吹く

南海トラフ地震津波の想定にペットボトルは冷蔵庫にひとつ

読経の手休めて僧は仏壇の漆金箔の塗り替えを勧める

いましばし吾が生くる身に安らぎの余白のほしき山茶花零る

〈短歌総合誌『歌壇』に掲載〉

色うき国

2013・7

咲きそめる日も早かりし桜花散る日を急ぐ攫(さら)われるかに

微粒子の霧を浴びるか大陸の故なきことのなきまつりごと

病み臥せば装いて行くあてもなく吊しし去年(こぞ)の気に入りの衣(きぬ)

廃田の続く旅路を夫と行く色うき国の春一番吹く

大いなる錯誤のありて傷つけし人への思い自己嫌悪に満つ

〈日本歌人クラブ『風』に掲載〉

消化器内科病棟

2013・7

消灯後の病室の天井に歌のことばを這わせてまどろむ

小恙が大病となり初夏(はつなつ)のベッドに数える五句三十一音

日曜の休診の日も回りくれ吾がいらいらを癒せる主治医

弱音吐く吾が給食の膳を下げ励ましてゆく栄養士のいて

街の声途絶えし部屋に点滴の管ぶら下げて息深く吸う

〈短歌総合新聞『梧葉』に掲載〉

夫を詠む

猫ばかり集う公園の補修為し遊具整うる町内会長の夫(つま)

ペアでと夫(つま)の買いくる草木染めのロングスカーフ春浅き日に

七河川(ななかせん)一斉清掃の川べりに夫(つま)と引き上げる雑草と空き缶

あと少し残り世をともに生きたしと夫と語る朝の食卓

乗り継ぎの駅構内をうろうろと金婚旅行のわれら夫婦は

ひかり野に満つることを恃(たの)みつつ金婚の春を健やかに生きたし

牛乳びんの蓋開けかねる麻痺の手に新聞を読む元記者の夫(つま)

足弱り手に麻痺残る夫(つま)なればやさしき時を共有したき

夜の床に眠れぬらしき夫(つま)の咳聞きつつ夜なべの手を止め得ざり

バリアフリーの手摺につかまり上下する外出少なき夫(つま)の歳晩

カメラ持ち車椅子にて旅をする夫(つま)と迎えん新玉の年

映像を観つつ発する夫(つま)の声スポーツ音痴の吾は寡黙に

近詠の中から

2004～2013

雪被(かず)く四国山脈はるけくも野に摘む若菜に光耀う

鵯(ひよ)の来る臘梅の枝に初蕾さして賀春の空真澄なる

歳旦のひかり仰ぎてあと少し耀いながら生きたしと願う

災害も殺戮もなき新年(にいどし)を願いて賀状の厚き束解く

渇きゆく無援の白き街並に紅梅一樹気迫を見する

水やせて青春はるかと師の詠みし吉野川辺の紅(あか)き葛花

高校生に歌を詠む人いませんか教師の次男に歌誌を託しぬ

祖母われは代理参観窓際に視線を逸らすシャイな男(お)の孫

流星群天翔(あまかけ)る方(かた)にイラクの子ら銃声止まぬ日々を生きおり

ノーメイクで眼科より戻る風の道　昨日と今日の世界が変わる

隠し事ているらしき幼の眼われに優しき言葉かけゆく

行きつけの花屋の今朝は閉ざされて見知らぬ男がペンキ塗りおり

「九条」の署名集める朝市に土の匂いの媼の手が伸ぶ

風雪に研(と)がれし吾が身はしなくも華やかな知らせ受ける錦秋

荷を解けば四万十の鮎香に立ちて漁(すなど)りし人の心偲ばる

湯の里の滝川を流れる一ひらの命のような若葉に遇いぬ

美術館のルノアールの前若き日をスクラム組みし友に出会いぬ

憲法の危機を思(も)いて集い来し人ら五月の風に触れ合う

失せ物を探してひと日暮れゆきぬ吾が残照のなお短きに

広島の遺児の追悼しみわたり映像に襟ただす今日原爆忌

雨の日の葬(はふ)りに黒き蝙蝠傘の滴(しずく)を払い哀しみはらう

プランターに育てし苺うなかぶし穀雨に小さき粒の輝き

樗の実のここだ残りし枝の端(は)に白鷺一羽孤高を保つ

いじめ苦に幼きいのち断たれゆく秋蝶ひとつ飛び交う真昼

水ひびく山の谷間に秋あかね別れし人の振り向かずゆく

一瞬に雪崩れるごとく曼珠沙華狂える地球に抱(いだ)かれて咲く

「おるき」とはやがて楽しく面白き星の命名土佐弁が翔(かけ)る

風のように光のように旅立ちし師は安らかに柩のなかに

花冷えを薄ものをまといて街に出る真昼のアンニュイ散るさくら花

浅蜊採る舟は一艘も出(い)でずして店頭に並ぶ外(と)つ国の貝

残されし命を生きて歌詠みぬ枯れ木累々政治の冬に

米どころ抑えて生(あ)るる日本一「土佐天空の郷(さと)」の挑みし

海浜に打ち寄せられて乾きゆく石蕈(あおさ)の見せる哀しみの波

麦藁帽子押さえて歩む田舎道渡り来る風無韻のカリヨン

影法師曳きつつ歩む秋の夜のことば少なき親子の語らい

ひとすじの人生のあり水無月の万緑のなかに吾が影映す

鳴きつつもいのち燃やして蝉しぐれ今朝を旅立つ吾を励ます

低体温のわが身のうちに水銀は上がりゆくなり八月十五日

風の日に届きしという京扇子柩の胸に抱きて逝きしか　（河野裕子さん）

街角に秋の風連れやって来て移動図書館のメロディ弾む

不条理のまつりごと身にしむこの秋を海鵜（うみう）啼く声波越えゆきぬ

外房の波暖かく膨らみてあしたを生きる人間家族

ケアハウスの窓から友も観ているか今宵十五夜の月は真ん丸

初明かりとう靄の漂いのぼり来る空を仰ぎて迎える元朝

硯の水はつか注ぎ足し墨を磨る追悼の歌詠む花冷えの宵

草莽（そうもう）のおみないざ立て「九条」の戦（いくさ）なき世を守らんがため

肩パッド外して古き服を着る私自身のスリムな改革

アジアからの厳しきまなこ靖国へいま問われいる歴史認識

黒き肢体を切り返し飛ぶ夏燕われにも欲しき決断のとき

南いに疲れし叔父の葬(はふ)り終え吾が出口なき地下街をゆく

歳月の襞おりなして血脈のまた一つ消ゆ吹雪の春に

新道の傍(かたえ)に淡く咲く樗(おうち)　煙草屋ありし杏き日のまま

この街の最後のパン屋が閉むる朝　掌(て)にほかほかの香をいとおしむ

何かしらやる気なくして落丁の本を見ているような日の暮れ

一日を探しものに明け暮れて損をした日の茗荷の苦さ

些細なることだと割り切れない電話テレビの音を低くさせおり

今日こそは心患うことなしに居たいと留守電セットしておく

初夏(はつなつ)の山形からのさくらんぼこの艶っぽさは汚染を知らぬ

児(こ)ら帰り遊具しずもる公園のベンチに拾う朱き落葉

毒矢吹く政権の蔭に生きてゆく戦争を潜りし老いびとたちは

私の周りに吹き寄せる秋風に髪乾かしてすべてを許す

夜もすがら吹き荒るる嵐しばらくは土佐路を逸れて怠惰なる秋